

実習報告（関係機関実習）

総合学科における「探究的な学習」を基にした カリキュラムマネジメントについて

重松 晃三朗（教育経営探究コース：現職教員）

1. 探究実習のテーマと設定の理由

総合学科である現任校には6つの系列があり、それぞれの系列が独自の教育活動を行っている。系列間のつながりを見ると、教職員の協働的な意識は薄いように感じられる。現任校の課題として、総合学科の教育の特色の一つである実践的・体験的な学習を重視する上で、6系列間を跨いだ自由な科目選択や系列間の連携による講義、実習が教育効果を生むと思われるが、現時点において6系列間を跨いだ協働的な授業実践は実現できていない。次に、教職員間の協働的な体制について、普段のコミュニケーションは問題ないが、各系列担当教職員が系列に関する教科指導に集中することで、他系列に関心を持たない、干渉しないような雰囲気が暗黙的に確立されているように思われる。

以上の現任校の課題により、「総合的な探究の時間」を活用した系列を跨いだ授業実践を考える。系列間の取り組みを全ての授業で試みるのではなく、まずは「総合的な探究の時間」で実践し、総合学科であることを生かした教育活動を考える必要がある。また、各系列の特徴を活かしながら、生徒たちが主体的に実践的・体験的な教育活動ができるようなカリキュラムマネジメントが必要であり、それを実現する教職員間の協働的な体制作りが重要であると考え、研究テーマを設定した。

2. 探究実習の研究目標

(1) 佐賀県教育庁学校教育課

県内各学校の教育課程を調査することで、各学校・校種ごとの教育課程編成の特徴や、教育課程における「総合的な探究の時間」の位置づけ等を探る。また、県内の普通科高校・専門学科高校・総合学科高校における「総合的な探究の時間」の具体的な取り組みや、各総合学科高校の系列間での連携した授業実践等を探り、現任校での学校変革のヒントとなる情報を収集する。

(2) 佐賀県教育庁教育振興課

学校運営協議会を設置している県内の学校において、どのように取り組みを行っているか、それぞれの現状や課題とともに探る。また、学校と外部機関・外部人材との連携の実情を知り、現任校の実践的・体験的な教育活動に適した外部連携の形態を考える。

3. 探究実習の概要

探究実習は、前半10日間は佐賀県教育庁学校教育課で、後半10日間は佐賀県教育庁教育振興課で行った（表）。

表1 関係機関実習先2カ所の主な実習内容

佐賀県教育庁 学校教育課	<ul style="list-style-type: none"> ● 指導主幹講話及び学校教育課業務に関する各担当職員による講義 ● 教育課程研究集会の補助及び受講 ● 佐賀県内県立高校の教育課程の構成及び「総合的な探究の時間」の取り組みに関する調査研究
佐賀県教育庁 教育振興課	<ul style="list-style-type: none"> ● 副課長講話及び教育振興課業務に関する各担当職員による講義 ● SAGA コラボレーションスクール指定校への学校訪問 ● SAGA コラボレーションスクール第1回情報交換会の補助及び参加

4. 探究実習の成果と課題

(1) 佐賀県教育庁学校教育課

令和4年度の教育課程表、教育課程編成における基本方針をもとに、各校の教育課程編成の特徴や「総合的な探究の時間」の位置づけ等について調査研究を行った。県内普通科高校、専門学科高校、総合学科高校の教育課程を調査し、特に4校の総合学科高校については重点的に調査した。県内の総合学科高校は系列の特徴を活かした教育課程の編成が為されている。地域社会との連携、多くの体験や経験からコミュニケーション能力を養い、生徒の人間性や社会性を高めることを考えた教育課程など、同じ総合学科であっても各校の生徒の実情や地域性を反映したうえで、編成されているようであることが分かる。また、「総合的な探究の時間」に関して、総合学科高校は普通科高校や専門学科高校に比べて授業時間数が多く、系列や各教科で学んだことなどを生徒たちが主体的・総合的に実践できる科目になっていると考える。さらに、総合学科高校は、普通科高校、専門学科高校とは違い多くの選択科目や学校設定科目があり、それぞれの学校の各系列において特徴的な教育活動が実践されているようであった。以上のことから、教育課程を編成する上で自校の生徒・学校の実態、地域の実情を把握することは重要であり、目指すべき学校像や教育活動の指針を明確にすることで、教育課程編成上の軸ができ、「何を指すのか」が分かる各学校独自の教育課程と、それに則ったカリキュラムマネジメントが実践されると考える。また、総合学科高校には多くの学校設定科目が設けられているが、生徒への教育効果を常に検証しながら、科目の中身や指導法を改良・改善しようとする教職員の姿勢が必要と感じる。現任校においても、学校の教育活動を改善しようとする教職員の協働的な話し合いが出来ような学校組織の構築が重要になると考える。

(2) 佐賀県教育庁教育振興課

佐賀県が今年度より取り組んでいる「SAGA 唯一無二の学校魅力化実践事業」の一つとして、県内の高校9校をSAGA コラボレーション・スクール（以降、「SCS」）に指定し、各指定校において学校の魅力化に向けた活動が実施されている。SCSは校内・校外の人材が委員として参加する学校魅力強化委員会によって学校が運営される。学校魅力強化委員会の活動は、教育目標や学校運営方針の承認、具体的な協働活動による教育プログラムの企画・運営、社会に開かれた教育課程の研修、編成、実践などであり、学校運営の核となる組織である。各指定校では主幹教諭等のミドルリーダーが担当者となり事業を進めているようであるが、一部職員の負担が大きくなっているため、校内組織体制を見直す必要性を感じた。他方、指定校が置かれる地域の実情や学校との連携に対する自治体の考え方はそれぞれであり、各学校に適した地域との連携を考えることが重要と考える。地域との連携を進める上で、校内の協力体制が重要であるため、教職員間の協働的な議論や活動ができる体制づくりは必須と思われる。一方、学校魅力強化委員会の委員選定に関しては各学校で考え方に違いがあるが、数年先を見越した人選など、継続的な取り組みが出来る組織づくりの必要性を感じた。県立高校が地域との繋がりを持つことは生徒の教育上、有益な事であるとともに、将来の地域社会を形成する人づくりにおいても重要と思われる。

(3) 次年度の学校変革試行実習に向けて

総合学科高校における系列間を横断した教育活動の実践を考えるうえで、「総合的な探究の時間」の中で各系列の特性を生かしながら、系列間が「つながり」を持った教育活動は有意義と思われる。各系列は専門性を深める学びに取り組んでおり、普段の教育活動の中において系列間を横断した取り組みは難しいが、系列や教科を特定しない「総合的な探究の時間」の中で系列間が「つながり」を持った教育について考えたい。また、総合学科の特性に合った「総合的な探究の時間」を現任校の教職員と協働的な関係性のもとに考え、つくり上げることが今後の学校変革試行実習において重要になると考える。